View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

春日曼荼羅と最古の地図から読みとる 春日山原始林とその周辺の植生景観

前　迫　ゆ　り

Landscapes and vegetation of Mount Kasuga and the surrounding Kasuga Field, using the oldest known map of the area and ancient cultural artifacts such as the Kasuga Mandalas

MAESAKO Yuri

Abstract

I studied ancient Mount Kasuga and its surrounding landscape and vegetation using the oldest known map of the area, drawn in 756 (‘*Todaiji Sankai Shiishi Zu*’), and cultural artifacts such as the Kasuga mandalas from the Kamakura period and the Illustrated Tales of the Miracles of the Kasuga Deity (‘*Kasuga Gongen Kenki*’). One Kasuga Shrine mandala (the ‘*Kasuga Miya Mandala*’) depicts Mount Mikasa, the abode of the Kasuga deity in front of Mount Kasuga, with a bird’s-eye view of the landscape. Other images on Kasuga mandalas include a spring scene of Kasugano with cherry blossoms and willows, and an autumn scene with many deer. These are likely to be connected to the landscape of Kasugayama, a warm temperate evergreen forest, and Nara Park, which still contains deer. The winter scene of Mount Kasuga in ‘*Kasuga Gongen Kenki*’ clearly indicates that the forest consisted mainly of evergreen broad-leaved trees, and contained some deciduous broad-leaved trees and conifers. The deer mandala depicts the image of the sacred tree (‘sakaki’: *Cleyera japonica*) behind a deer, symbolically reflecting the presence of the god (‘kami’). The image titled Kasuga Deities Departing from Kashima Shrine (‘*Kashimadachi Shin’ ei Zu*’) also shows vegetation and gods and the presence of sacred deer. I propose that the plant in this image may be *Podocarpus nagi*, which was respectfully presented to the Kasuga Shrine (‘*Kasuga Taisha*’) by other prefectures in the Middle Ages. This is supported by plant morphology and the presence of *P. nagi* on Mount Mikasa. This study suggests that today’s Mount Kasuga and the surrounding Kasuga Field retain the cultural landscapes of the Middle Ages.

平成27年１月７日　原稿受理
大阪産業大学　人間環境学部生活環境学科教授

Keywords：Sankai Shiishi Zu, Kasuga Mandalas, Kasuga Field, warm-temperate evergreen forest, cultural landscape, Sika deer

要　旨

ニホンジカの影響を大きく受けている世界遺産春日山原始林および春日野一帯はかつてどのような植生景観であり，今に至っているのだろうか。千年以上にわたる自然史を紐解くヒントが，700年代に描かれた最古の地図，鎌倉時代から室町時代に描かれた春日曼荼羅および春日権現験記などに代表される絵図にあると考えられる。本報では，日本最古の地図「東大寺山堺四至図」および鎌倉時代の春日曼荼羅などの絵図から，春日山およびその周辺の植生景観を読み取り，考察した。

キーワード：東大寺山堺四至図，春日曼荼羅，春日野，照葉樹林，文化的景観，シカ

はじめに

春日大社，興福寺，東大寺といった世界文化遺産の寺社群とともに，自然景観の要を形成する春日山原始林はそれ自体も世界文化遺産，かつ特別天然記念物である。春日山原始林にはシイ・カシ類が優占する照葉樹林が成立するが，春日山原始林の裾野はいわゆる春日野とよばれる若干の起伏を含む平坦域がひろがる。奈良公園として明治期に整備された（奈良公園編集委員会，1982）春日野一帯は，現在，アカマツ，クロマツ，コジイ，イチイガシ，クスノキなどの高木からなる樹木群とニホンジカ（以後，シカ）との関係性のなかで成立しているシバやノチドメなどの短草型草地からなる。

奈良公園一帯において，昭和期（1920年代）以降の顕著な景観的変化は奈良公園に昭和初期に植栽されたナンキンハゼ（中国原産の外来種）の存在である。紅葉時期がカエデ類よりも早いため，近年，奈良公園および若草山において，いち早く，秋の景観を特徴付けている（前迫，2013）。

７－８世紀の万葉集には春日野のシカが多く詠まれている。その頃からシカは生息していたと考えられるが，奈良公園一帯に生息する「奈良のシカ」は，現在，春日山原始林および春日野一帯の植生および景観にプラスとマイナスの生態的影響を与えている（前迫，2013）。かつて，この地域はどのような植生景観であり，今に至っているのだろうか。千年以上にわたる自然史を紐解くヒントが，700年代に描かれた最古の地図，鎌倉時代から室町時代に描かれた春日曼荼羅および春日権現験記などに代表される絵図にあると考えられる。

絵図から建造物や植物などの風景モチーフを検証した行徳（1996）は，植物の本数や配置が作品によって多少の相違はあるものの，現在の位置と比較した場合に，必ず描かれている植物が含まれており，その描写が正確であると指摘している。

春日曼荼羅は，春日宮曼荼羅，春日鹿曼荼羅，春日社寺曼荼羅など，描かれる対象によっていくつかの名称があるが，本報では，日本最古の地図「東大寺山堺四至図」および根津美術館（2011）の図録「春日の風景－麗しき聖地のイメージ－」に収録された春日曼荼羅や春日権現験記繪から，植生と植物を読み取り，春日山およびその周辺の春日野一帯の植生および文化的景観について考察する。

最古の地図に見る700年代の春日山と若草山

756年に作成された日本最古の地図「東大寺山堺四至図（さんかいしいし ず）」は，正倉院が所蔵するが，その模写本がデジタル学術資料として奈良女子大学学術情報センターにウェブ公開されている（図１）。本地図には，東を上に，御蓋山と南北度山峯（現在の春日山）が地図の真ん中に描かれ，東大寺および興福寺の位置関係が明確に描かれている。興福寺と記された領域にはマツ林が描かれているが，このマツ林は今も興福寺の植生景観として継承されている。

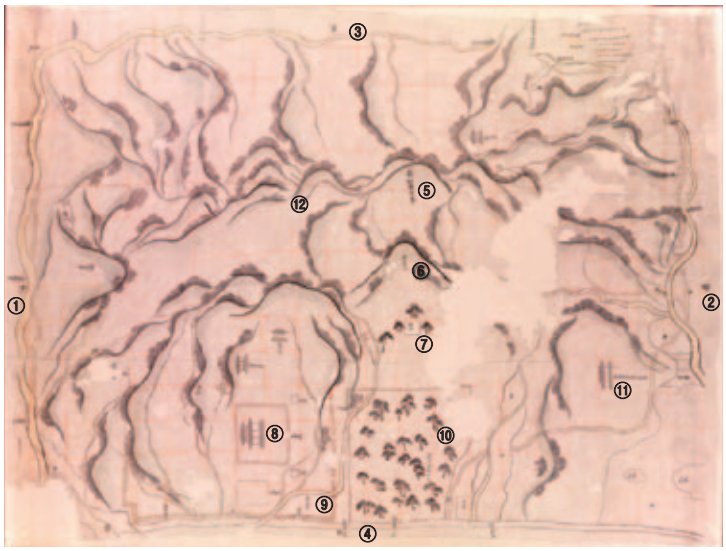

図１．東大寺山堺四至図（模写本）．奈良女子大学所蔵．天平勝宝８（756）歳６月９日に作成された，東大寺の寺域を示す図．北・東には大仏殿・羂索堂・千手堂などの寺域に含まれる多くの山･川が描かれている．地図中の数字①～⑪はつぎの通りである。①北，②南，③東，④西，⑤南北度山峯（春日山），⑥御蓋山，⑦神地，⑧大仏殿，⑨東大寺，⑩山階寺（興福寺），⑪新薬師寺，⑫若草山（地名は記されてない）．（画像掲載について奈良女子大学学術情報センターの許諾済）

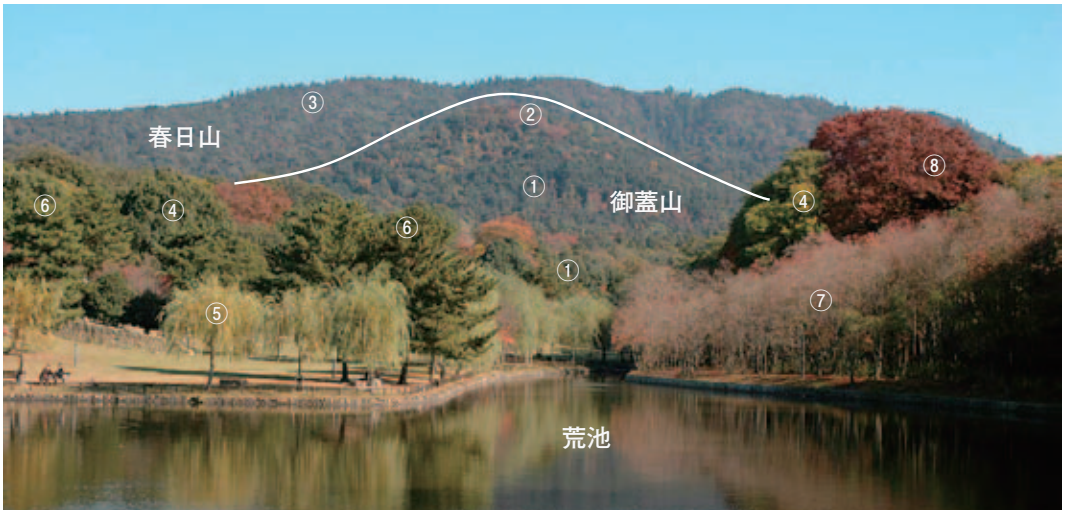

図２．奈良公園，御蓋山および春日山原始林．①スギ，②落葉広葉樹，③照葉樹林，④常緑広葉樹，⑤ヤナギ，⑥マツ，⑦ナンキンハゼ，⑧ケヤキ（11月下旬）

若草山という名称は記されていないものの，南北度山峯の北側に位置する現在の若草山のあたりは，現在のような草地ではなく，森林と隆起が描かれている。神奈備としての御蓋山（春日大社境内）と春日山が地図の中心に描かれ，御蓋山の前方は「神地」と明記され，当時の人々の意識が表れている。神地と記されている部分は春日大社境内地で，現在，ナギ群落が成立しているあたりである。当時，どの程度の大きさのナギが献木されたのか不明であるが，春日大社学芸員の松浦氏によると，春日大社の宮司日誌には1400年あたりから，ナギの樹木が大きくなったという記述がでてくるとのことであった。現在，春日大社境内の御蓋山のナギ群落は純群落に近い組成をもち，天然記念物に指定されている。

これらの配置などから，当時の人々が社寺と山（森林）に敬意の念をはらっていたことが伺える。森と社寺からなる春日山，御蓋山そして春日野一帯の文化的景観は今に引き継がれている（図２）。

春日鹿曼荼羅と植物

春日大社と鹿が深いつながりをもち，かつて春日野一帯のシカが神鹿とされたことはよく知られている。鎌倉時代から室町時代にかけて描かれた春日鹿曼荼羅は複数存在するが，室町時代に描かれた根津美術館所蔵の春日鹿曼荼羅（図３）と南北朝から室町時代の作とされる春日大社所蔵の鹿島立神影図（図３）には，鹿島から御蓋山に降臨した「神」の武甕槌命（たけみかづちのみこと），シカの背後に根をはる植物，その後方に御蓋山と春日山が描かれている。シ

（円内の拡大）

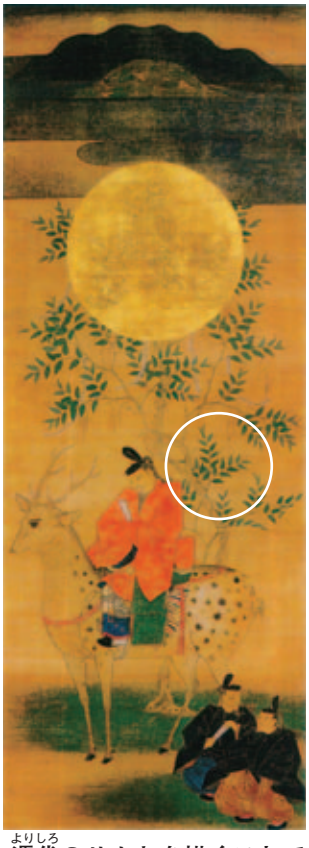

図３．（左）春日鹿曼荼羅（室町時代，根津美術館所蔵）．シカの背に憑代（よりしろ）のサカキを描くことで神霊の存在を示す（根津美術館，2011）．（右）鹿島立神影図（南北朝～室町時代，奈良春日大社所蔵）767年，白鹿に乗った武甕槌命が鹿島から御蓋山に来臨したことを示す。遠景に春日山と御蓋山を配し，ふたりの神官をしたがえている。両図にサカキが描かれているとされる．葉の形態はナギ（円内，拡大）にも類似するが，葉が互生であることから，サカキを描いたと考えられる。（画像掲載について根津美術館の許諾済）

カが神鹿とされたことを知るに十分なものであるが，ここではシカの背後に描かれている植物に注目したい。

春日鹿曼荼羅に描かれた植物は榊（サカキ）とされている（松村，2011）。サカキはツバキ科の常緑広葉樹で，古くより神事に用いられる植物で，御蓋山および春日山一帯に生育する。この植物の葉の形状および葉の付き方，さらには鹿島立神影図にフジとともに描かれている樹木形態から，「ナギ」の可能性も考えられるが，互生である点はサカキを描いたと考えられる。

ナギはマキ科の常緑針葉樹で，本州の和歌山県と山口県，四国，九州，琉球および台湾で自生するが（佐竹，1989），奈良には自生しない。春日大社に献木され，御蓋山に植栽されたと考えられており，シカが採食しないため，現在では御蓋山のみならず，春日山原

図４．御蓋山のナギ群落（天然記念物）．ナギの成木から稚樹および実生までのナギ（矢印）が生育する．林内にはナギのほかに，イヌガシ，イワヒメワラビ，ナチシダ，日本固有種カミガモシダなど，シカに採食されない植物が生育する．

図５．御蓋山のサカキ（左）とナギ（右）．前者の葉は互生，長楕円形．腋芽は少ない．葉柄は５mm程度．後者は対生，楕円状披針形から卵状楕円形で葉の基部に腋芽が付いている．葉柄は２mm程度で目立たない．

始林にも拡がっている（Maesako et al., 2007）。シカは草本植物だけでなく，樹木の枝葉を採食するが，ナギは採食されないことや暖温帯の気候条件が生育に適していたため，長い時間をかけてナギ群落（図４）が形成されたと考えられる。

ナギの葉は先端に向かって細くなる楕円状披針形あるいは卵状楕円形であり（図５），絵図に描かれている葉の形状はサカキよりもナギの葉に近い。葉はナギのように対生で描かれている部分とサカキのように互生で描かれている部分が混在している（図３）。根津美術館所蔵の２枚の春日鹿曼荼羅には対生の葉が多く描かれている。

春日神鹿御正体（鎌倉時代，細見美術館所蔵）のブロンズ像も，「シカの背に榊を立て」と解説されている（根津美術館，2011）。この植物も，サカキよりナギに近い形状の葉柄および葉身にみえる（図６）。サカキは５mm 程度の葉柄があるが，ナギは１－２mm 程

図６．春日神鹿御正体（鎌倉時代から十四世紀）．神鹿の背に榊を立て，神鏡を掲げている．植物はサカキとされるが，ナギによく似ている。（右）円内の拡大．（画像掲載について根津美術館の許諾済）

図７．一の鳥居からみた参道のマツ林景観．矢印はナギ（左）．12月17日の若宮おん祭に際して，鳥居につけられたナギ（右）．2014年12月19日撮影

度のごく短い葉柄である。とくに頂芽と腋芽の付き方はナギにきわめて近い。葉の付き方は対生と互生の両方ある。今も全国の神社にナギが植栽されていることや春日大社への献木説とあいまって，ナギの可能性も考えられる。しかし松浦氏によると，あくまでもサカキが神の木として第一位のものであり，サカキは当時の宮司日誌にも繰り返しでてくることから，春日鹿曼荼羅などに描かれた植物がナギである可能性はないと言う見解であった。

春日若宮おん祭（国指定重要無形民俗文化財．毎年12月17日に実施）に際して一の鳥居にサカキがつけられるが，この数年，鳥居にはナギが付けられている（図７）。これは歴史を紐解いての解釈であるのかと思ったが，松浦氏によると，シカによるサカキの食害が激しいためサカキが不足しており，サカキに次いで神聖な木とされるナギを用いているとのことであった。

鎌倉時代の絵図・ブロンズ像にはナギとも解釈できる樹木が描かれているが，サカキに比べると，ナギに関する記録は少なく，シカや神と共に描かれた植物はサカキと解釈するのが妥当のようである。その一方，宮司日誌にはナギが大きくなったという記載があることから，鎌倉時代には御蓋山および神地のナギが成木に達していたと推察できる。

現在，御蓋山および春日大社境内のナギ群落には国外外来種のナンキンハゼが侵入するなど，森林の変容が生じている（前迫・稲田，2013）。ナギは文化的背景をもちながら，1000年という時間を経て，シカが採食しないことによって春日山原始林にも拡散するという生態的課題を抱えている（Maesako et al., 2007）。「奈良のシカ」（天然記念物）と気象条件に助けられてナギは群落を形成するまでに分布が拡大したが，照葉樹林にも拡散していることから，今後，春日山原始林の植生景観が大きく変容することが危惧される。

春日権現験記繪にみる春日山の植生景観

春日権現験記繪巻十九（1309年頃）には雪をかぶった春日山がきわめて色鮮やかに，明解に描かれている（図８）。「雪は，むしろ春日神の静かな怒りを表しているようにもみえる。（中略）春日の山全体を唯一この段のみに描くことによって，その神威の大きさを効果的に印象づけることに成功している」と記されているように（松原，2011），本図は常緑樹の緑色と落葉樹の茶色と雪の白色という色彩の鮮やかさと木々の精密さと神々しさに溢れている。

注目すべきは冬期に緑色の葉をつけている，いわゆる常緑広葉樹が多く描かれ，スギに代表される常緑針葉樹，紅葉あるいはすでに葉を落としている落葉広葉樹が，それぞれの比率がわかるほどに明確に描かれている点である。春日山の樹木が均一ではなく，多様な

図８．春日権現験記繪　第十九巻（鎌倉時代，宮内庁）．常緑広葉樹，落葉広葉樹および針葉樹からなる春日山が描かれている。（画像掲載について根津美術館の許諾済）

図９．春日社寺曼荼羅（南北朝時代，根津美術館）．一の鳥居（現在の一の鳥居は本図の位置よりさらに上方）．興福寺五重の塔（手前）から，東に位置する春日山までが描かれている。①ヤナギ，②向影のマツ，③サカキ（解説による），④サクラ，⑤マツ，⑥スギ，⑦広葉樹，⑧若草山，⑨春日山，⑩御蓋山．（画像掲載について根津美術館の許諾済）

樹種構成であることが，当時の人々にとっても印象的であったことが伺える。

春日曼荼羅と植生景観

春日山，御蓋山そして麓の春日大社と春日野を描いた春日宮曼荼羅および春日社寺曼荼羅は，南市町自治会所蔵，国立博物館所蔵，根津美術館所蔵などがあり，多く存在する。春日宮曼荼羅とは，春日神が鎮まる神地や社，すなわち御蓋山や春日山，春日社の社頭，東西両塔などの社殿を配する春日野を俯瞰で表したものである（根津美術館，2011）。ここではシカが多く描かれており，植物の形状や彩色も鮮やかな根津美術館所蔵の春日社寺曼荼羅（南北朝時代，図９）から植生景観をたどる。

春日社寺曼荼羅の解説（根津美術館，2011）によると，一の鳥居付近の樹木はサカキとある。参道には枝分かれしたりっぱな影向（ようごう）の松が描かれている。一の鳥居から二の鳥居，

さらには浅茅が原にシカが40頭ほど描かれている。ヤナギの葉が緑色で長く伸びていることを考えると，季節は３月から４月であり，淡いピンク色の樹木はウメではなく，サクラと考えられる。春日野にはマツとスギが多く描かれているが，それ以外にも広葉樹が点在している。現在の奈良公園につながる植生景観であるが，参道以外は緑色であり，樹木の下には草地が拡がっているさまが描かれている。シカは秋の景物であることから（梅沢，2011），春と秋の景観をひとつの図に配したことになるが，美術的流儀よりも自然のあり様を忠実に描いたのかもしれない。

700年代の東大寺山堺四至図に森林として描かれていた若草山は，この図においては緑色の草地として描かれており，そこに三頭のシカが描かれている。御蓋山には緑色，黄色，青色などで樹木が描かれており，おそらく新緑の色とりどりの季節をあらわしていると思われる。その後方の春日山は山際を紺色で縁取られ。山全体は御蓋山よりも深い緑色で樹冠が描かれており，照葉樹林としての荘厳さが感じられる。

春日宮曼荼羅を構成するモチーフについては，実際に社殿があった位置や建築の実情に即して描かれており，植物の描写についても必ず描かれているものがあると指摘されている（行徳，1996）。つまり，この図の神や仏に対する描画を除いた自然景観については，当時の景観をかなりよく反映していると考えられる。

鎌倉時代から南北朝時代に描かれた，数百年から千有余年前の春日野の樹木は，地面から枝葉が伸びており，地面は緑である。当時の人々の目には緑豊かな明るい印象の春日野と荘厳な春日山として写っていたことを示唆する。現在の奈良公園の樹木はシカにより，下部の枝葉が採食され，ディアラインが形成される点が，当時の絵図と異なる点ではあるが，シカが群れる春日野の植生景観は，おおよそ現在にも引き継がれている。

春日名号（みょうごう）曼荼羅（鎌倉時代，奈良国立博物館所蔵）に描かれた春日山，御蓋山そして春日野にはサクラ，マツが多く描かれているが，左下のシカにススキのような長草型草本が描かれている。現在の浅茅が原から飛火野一帯は短草型のシバ地であるが，かつては長草型草本がところどころに残る春日野であり，厳密に言えば，現在の草地景観とは異なるものであったかもしれない。

春日宮曼荼羅や春日社寺曼荼羅に描かれた御蓋山は，春に新緑が鮮やかな落葉広葉樹が優占する森林であったことが伺えるが，春日山はあくまでも緑濃く，深い森林として描かれている。1000年にわたって引き継がれてきたこの植生景観は，中世の戦国時代や近世の戦争のたびに荒廃し，何度も変遷を繰り返してきたはずである。しかし，今なおその文化的景観と植生景観が引き継がれているのは，春日山原始林や御蓋山などの森林生態系を基盤としながら，世界文化遺産の寺社群や奈良のシカを育んできた奈良の人々の知恵と風土

の賜ともいえるだろう。

謝辞

草稿に対して貴重なコメントをいただいた京都大学名誉教授渡辺弘之博士，春日大社のナギに関して有益な情報をいただいた同学芸員松浦和歌子氏に厚くお礼申し上げる。画像の掲載を許諾いただいた根津美術館および奈良女子大学学術情報センターに謝意を表する。

引用文献

行徳真一郎．1996．春日宮曼荼羅図の風景表現－仏性と神性のかたち．東京国立博物館研究誌，541：13-42.

前迫ゆり（編著）．2013.「世界遺産春日山原始林－照葉樹林とシカをめぐる生態と文化」．255pp．ナカニシヤ出版，京都.

前迫ゆり・稲田友弥．2013．御蓋山のナギ林におけるナンキンハゼの侵入と開空率の関係．社叢学研究，11：80-92.

Maesako, Y., Nanami, S. and Kanzaki, M. 2007. Spatial distribution of two invasive alien species. *Podocarpus nagi* and *Sapium sebiferum* spreading in a warm-temperate evergreen forest of the Kasugayama Forest Reserve, Japan. Vegetation Science, 24: 103-112.

松原　茂．2011．雪にこめられた神威－「春日権現記繪」第十九第一段－.「春日の風景　麗しき聖地のイメージ」．66-67．根津美術館，東京.

松村和歌子．2011．春日曼荼羅に見える聖性の源流.「春日の風景　麗しき聖地のイメージ」．95-103．根津美術館，東京.

奈良公園編集委員会（編）．1982．奈良公園史．529pp．奈良.

根津美術館．2011.「春日の風景　麗しき聖地のイメージ」．141pp．根津美術館，東京.

佐竹義輔．1989．マキ科.「日本の野生植物　木本Ⅰ」佐竹義輔・原　寛・亘理俊次・富成忠夫（編）．22．平凡社，東京.

梅沢　恵．春日におけるイメージの変相－山の端の円相をめぐって－.「春日の風景　麗しき聖地のイメージ」．112-118．根津美術館，東京.